

民俗学の差異化に関する一考察

—他領域との対話を通して—

前川 智子 *

MAEKAWA Tomoko

An Observation on the Differentiation of Folklore Studies through Dialogues with Other Academic Fields

This paper discusses future prospects of folklore studies through a differentiation with academic discussions in other disciplines.

The author considers the position of Japanese folklore studies and the internationalization in folklore to be one of the projects of the Society of Living Folklore. From here an attempt is made to analyze the position of folklore studies in a society characterized by globalization.

Next, the author discusses the limitations of folklore studies, using as an example the Society of Living Folklore with ethnology as it occurred in France. Unlike American and German folklore studies, French folklore studies have been linked to ethnology. In addition, the author focuses on the nature and possibilities of folklore researches. Finally, two issues are brought up that require attention: addressing the problem of how folklore studies actually perceive modern society, and differentiating folklore studies from other disciplines.

Three expectations are formulated for the future of the Society of Living Folklore:

The first is that the main aspect of folklore studies should be to capture the different aspects of the changes that influence our daily life. This would mean broadening the field of folklore studies, which has been restricted until now, to a wider range of research. The second expectation involves the participation of people from different backgrounds. This kind of research environment will undoubtedly give birth to new concepts and ideas. It would be profitable for the Society of Living Folklore to develop into such an environment. My final request would be to encourage an interdisciplinary dialogue, through which the limitations and possibilities of folklore studies will become clearer.

キーワード：民俗学の独自性 伝承概念 郷友会 グローバル化 フランスの民族学

* 筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程

はじめに

本稿の主題は、現代民俗学の独自性についての可能性を考察することである。

民俗学の落日という研究者の危機意識の背景には、民俗学が現代社会の変化を射程に入れるための学的枠組みの限界という問題がある⁽¹⁾。この前提に立つ時、民俗学はいかに現代社会を対象として、他領域である社会学や人類学との研究上の個性を示すことができるのだろうか。民俗学と現代社会という問題に接近するために、キーワードとして本稿が取り上げたのは、他領域との対話を通してみた民俗学の差異化である。多くの場合、人間に関わる各学問の対象は重複しているが、対象へのアプローチや方法によって、それぞれの学問の独自性が顕著となる⁽²⁾。ここで取り上げる民俗学の差異化とは、現代社会の問題へと民俗学が介入するために、他領域との差異を持つ枠組みを構成することを意味するのである。

本稿は以下の手順を追って論じたい。第1章でフィールドを共有する歴史学と人類学など他領域との対話に関する必要性を指摘し、民俗学の独自性を伝承概念の議論から整理したい。第2章では、日本の民俗学に戻り、学を内省するために民俗学的研究とは何かという問いを立て、理論的問題の現況と現在学としての民俗学の可能性を捉えたい。第3章では、フランス民俗学から民族学への展開過程を通して、民俗学の限界性を論じる。フランス民俗学はドイツやアメリカの民俗学とは異なり早い段階で民族学に接合し、現在に至る。他国との比較を通して、日本の民俗学的研究の課題について考察したい。

1. 民俗学の差異化

民俗学は設立当初から歴史学と人類学の隣接学問に対して緊張関係を持っていた。石田英一郎は、日本民俗学の発展成長について2つの方向性を指摘する。第1は、日本史の一部としての学問である。その理由を石田は日本民俗学が「自民族の伝統的文化に対する回顧反省の学」であること、そして日本民俗学の設立背景を挙げている。周知のように柳田國男が民俗学を創設した背景には、文献史学に対する反発と批判があった。日本民俗学では文字資料からではなく口頭伝承のようなこれまで文献史学では扱われない資料を通して民衆の生活史を論じてきた⁽³⁾。第2は広義の人類学との統合へと至る方向性である。その理由を石田は、日本民俗学の目的とされた日本民族のエトスを明らかにするという点に求めている⁽⁴⁾。勿論、石田の指摘は当時の研究状況を反映したものであると同時に、アカデミズムにおいて固有の地位を確立しようとする日本民俗学が如何なる方向において展開していくかという観点から提出されたものであり、この見解に私たちが認識する民俗学の落日に対する解決策を見出す意図はない。

石田の指摘にあるように、日本の民俗学と隣接学問である歴史学や人類学の共通点や主題の共有に関する問題は十分に検討されるべき課題である⁽⁵⁾。今後の現代民俗学では、人類学と歴史学との接合に関わる検討のみではなく、現代社会というフィールドを共有する他領域との対話を通して民俗学の独自性を検討していく必要性をここで指摘したい。

民俗学の個性は、常民や伝承者に顕著なように、その概念に見出すことができる。他領域との差異化を図り、民俗学について考察するために伝承概念をここでは取り上げて論じたい。一般に、

民俗学の研究対象は民間伝承であるとされることから明らかなように、伝承という言葉は学の特性を示すからである⁽⁶⁾。

柳田国男は、民間伝承という語彙について以下のように述べる。「トラジションという語は、其本国においても色々政治上の連想があつて困ることは、日本今日の「伝統」という訳語が之を推測させる。そこでホピュレールといふ形容詞に、非常に重きを置いてもらふことになつて居るのだが、我々はそれを「民間」としか表現し得なかつた。その代わりに新たな感じのある伝承という語をもって、情実纏綿する伝統にさし替へることが出来たのである」[柳田 1934: 340]。伝承という語彙で彼が強調したのは、権力者によって操作され、構成される伝統ではなく、権力から疎外された人々が生活する風土に根ざした集約的な文化という点であった。「民間」の文化は、日常的に繰り返して実践されることで、共同に同一の感情を持って生活することができたと論者は考える。柳田はポピュレール *populaire* に重点を置き、その語彙を表現するためにトラジション *tradition* の訳語である伝統ではなく、伝承という語彙を使用することで「新たな感じ」を含ませたのである。

柳田の意図に表れているように、民俗学の主題とは、権力をもつものと対置される民衆の日常の実践による集約性に根ざした伝承文化であった。篠原徹は、民俗を「近代以降の教育システム以外の方法、主として伝承という伝達形式をとる知識や技能の総体」とし、民俗学は「そうした『民俗』を担う現在の人びとを研究」するとした[篠原 1996]。近代以降、国家機構による教育システムは構成されるが、民俗とはその権力により規定されずに人々が共有している知の様式とした。

平山和彦は、口頭伝承に見られるような生身の人間同士のかかわりを分析する側面を持つコミュニケーションの問題領域を指摘している[平山 1992]。伝承とは平山によると「基本的には人と人の間に展開される行為」とされ、伝承概念には次の7つの属性(日常性、共同性、類型性、反復性、倫理的規範性、風土性、教育性)が挙げられている⁽⁷⁾。共同性を生成しうる人と人の生身のコミュニケーションが人間形成に影響を与えることはいままでのないが、平山が指摘するように、口頭で伝達される情報は伝達手段が多様化する現代において、その価値は今後さらに検討すべき重要な課題であるといえよう。

民俗学において、民間伝承および伝承概念は他領域との差異化を可能とする概念として論じられてきた。一方で、このような伝承概念に対する批判がある。渡辺欣雄は、民俗学における従来の伝承概念や伝承者、民間伝承の定義に疑問を持つ。渡辺は、ある特定の伝承者から昔から伝わる内容を不変なものとして取り上げるのではなく、その伝承の内容を民俗知識として論じた。民俗知識とは、ある集団のなかに入り込んだ来訪者によって分けられる伝統的、または所与のカテゴリーにおける情報ではなく、話者の知識であるとする。同時に、沖縄の地方神歌の分析からコミュニティで伝達されていくという知識の動態性を論じた[渡辺 1990]。渡辺の指摘の中で、論者が強調したいことは、伝承とされた概念が現実社会では世代間の知識の伝達を意味するとは限らず、伝達された知識も変化するという点である。

また、現代では、情報の伝達は電子化され、口頭における伝達は教育システムにおける学校の教育現場などに限定されている。このような世相のなかで、近年の民俗学的研究では、文字を媒介とした情報伝達に関するものが見られる。情報化社会への視座を持つ古家信平の書承概念はその一例であるといえよう。

伝承概念を用いて、私たちを取り巻く現代社会の総体を捉えることは困難である。これが民俗

学の研究対象とされる伝承概念の限界性であると同時に、民俗学の落日として捉えられる実態の1つであるといえよう。しかし、グローバル化や移動者という視点から、伝承者や伝承母体に対する枠組みへの批判検討も進められている⁽⁸⁾。次章では、民俗学的研究をめぐる様々な議論を通して、現在学としての民俗学の可能性を考察したい。

2. 現在学としての民俗学的研究とは何か

本章では、現在学としての民俗学的研究について検討する。いわゆる参考辞典類に規定された民俗学の定義を検討するのではなく、民俗学を規定する側である研究者自身の内省的な考察に目を向ける。この文脈において論者は、自身の経験を踏まえた真野俊和の論考を、民俗学に対する内在的な眼差しを持つという観点から、民俗学的研究の内実を考察するためのテキストとして取り上げる。

真野は、民俗学が行なった独自の考察様式を「定義する」という観点から論じ、民俗学的研究の作法を抽出した。民俗学の概念規定はすでにその対象とされる事柄や物に対する理解が研究者たちに共有されており、定義自体が厳密な規定がなされないまま議論が展開されている傾向を指摘する。民俗学での定義とは仮説の提示であり、その定義を規定した研究者が分析し考察すべき問題となるものとする。よって、民俗学とは対象を捉えると同時に、考察する問題を自らの定義を通して理解する作業であるとした〔真野 2008a〕。

真野が「民俗学概説」として展開する一連の論考で論じる民俗学とその可能性は、客観性を必要とする自然科学や社会科学とは異なる非論理性である。この科学の否定ともいいうる側面を有するが故に、民俗学を「未完の学問」として捉える。その過程で、民俗学が観察による経験科学の一領域である点から、観察者の主観という問題を指摘する。研究する対象への客観的な理解ではなく、非観察者と観察者の相互作用によって対象の問題が発見されるとする。

これまで形成されてきた民俗学の対象や概念において注目すべき点は、常民や伝承者に顕著なように、ある土地に根ざした定住者を対象とした側面を見出すことができよう。この意味において、民俗学的研究とは、研究者自身の眼差しを通して、ある土地での固有の生活習俗を記述から、土地に根ざすことの重要性を再確認する作業と捉えることができる。

民俗学者は観察者と非観察者という関係を通して対象を記述するが、この素朴な作業はこれまで批判的に論じられたようなロマン主義やノスタルジックな懐古主義、さらにナショナリズムへと至る危険性もあることは周知の事実であろう。従来の民俗学が対象とした不変の部分である伝統は慎重な態度を必要とする危険な議論を含んでいたのである。例えば、岩竹美加子は近代や工業化以前の生活を理想化すると同時に、ノスタルジックな態度をとる立場を民俗学的思考と表現した。民俗学的思考は「地域の歴史や文化は最終的にある国家の歴史や文化に成長し、吸収されるという立場」をとる〔岩竹 1996: 35〕。岩竹は、民俗学の政治性をこれまで指摘された近代の国民意識における民族学の役割や思想的背景だけでなく、ロマン主義やナショナリズムをも含んだものとして捉えている。

民俗学の政治性という問題がある一方で、民俗学において主題とされたある土地に根ざすという関心は、人間の本源的な欲求の1つとして捉えることができる。それらは移民や出稼ぎ労働者の定住過程という現象を、現在の私たちの生活を取り巻く環境において容易に見つけ出すこと

ができる。

例えば、出郷してきた人々によって結成される郷友会を通して、近代以降出稼ぎ労働者として出郷した人々の都市における適応とその生活を知ることができる。論者が調査した沖永良部島出身者により神戸市に形成された神戸沖洲会は、島出身者が不慣れな都市生活を克服するために、大正期から郷友会を結成した。現在、会の目的は相互扶助から親睦へと変化しつつも、島の独自の文化により人々がその結衆を維持している〔前川 2008b〕。この郷友会は沖永良部島独自の民俗芸能や歌謡を媒介にして、日常的に集う場所である。このような場所を形成する人々の行為は、沖永良部島の島出身者が都市において自己の民俗文化を改変した伝承の一形態として見るができる。民俗の母体は主に「ムラ」として扱われてきたが、「ムラ」から移動する人々の観点から現代社会の民俗を論じる必要性を指摘できよう。

また、同会は、沖永良部島出身者の集まりであると同時に、工場で働く人々の相互交流の場所でもある。つまり、郷友会という結集の背景には、工業化による都市空間の形成がある。集団の成立は人々を結びつける理念や人々の心情と深く関わる時代性だけではなく、その都市空間と人々の結集を表象するのである。

人々の結集において場所とは、単に空間の一部を示すのではなく、様々な作法や関係性によって意味を与えられたものと捉えることができる。土地を離れた移動者は意味ある空間を自らの生のために創造したといえよう。そのような空間を形成する作用を持つのが、彼らの民俗文化である。グローバル化した現代社会における民俗文化のあり方をも射程にした概念が、今後の民俗学的研究には必要となるのではないだろうか。もちろん、土地に根ざした従来の民俗学的研究やその方法論を否定するものではない。しかし、現代社会における様々な変化を通して、これまで取り除かれていた対象を民俗学的研究として捉える余地をここで主張したい。

3. 民俗学の限界性—フランスの事例から

前章までは日本の民俗学がいかに独自性を確保するかという観点から論じたが、他国では民俗学はいかにその独自性を確保しつつ、展開したのだろうか⁽⁹⁾。現代民俗学会の事前研究会では、日本の民俗学の展望をより明確に理解するためにアメリカとドイツの民俗学の動向が紹介された。これらの動向は、日本の民俗学の転換点への視座が他国の民俗学に見出され、現状の打開策と課題を投げかけるものであった。ここでは、民俗学の国際化の観点から、フランスの民俗学が民族学に接合されていく展開を論じながら、今後の民俗学的研究とその研究対象の問題について取り上げたい。

論者はフランスで民族学を学び、現在民俗学的研究として地方都市における祭礼を中心とした人々の社会的結合に関する調査を進めているが⁽¹⁰⁾、日本の民俗学を専攻する動機について周囲から疑問に思われることが多かった。同様の状況は、母国で日本の文化研究を専門として、日本で現地の文化研究を希望する外国人留学生にも言えるだろう。一方で、比較民俗学研究では東アジア一帯の民俗調査が盛んで、比較のために精緻な分析が進められている。さらに、欧米諸国での民俗調査として新谷尚紀・関沢まゆみ両氏によるフランスのブルターニュ地方のキリスト教的祭礼も取り上げられている。今日、民俗学を専攻する学生や研究者のような調査者側の異文化体験は顕著である。民俗学のグローバル化は、前述したように、移動する人々という研究対象の次

元においても、また研究者自身の調査活動の次元でも進められてきた。国際化を諸外国との交流として捉えるのではなく、人と物の移動として特徴づけられるグローバル化という社会変動をも対象とした民俗学という視点から論じることは可能ではないだろうか⁽¹¹⁾。

ところで、論者が日本で研究を継続しようとした時、日本とフランスにおける文化研究のあり方の違いに戸惑いを覚えた。勿論、大学では文化人類学の講義は用意されていた。しかし、当時、フランスにおいて哲学的な学問領域とされる文化人類学で研究を継続する意図はなかった。論者が志向したのはより具体的な文化事象から対象を扱う研究領域だったからである。このような経緯を経て、フィールドにおける聞き書き調査による資料を扱う日本の民俗学に関心をもった。2国間の学問領域における差異を経験したことで、学問の独自性を所与のカテゴリーからではなく、その方法から捉える重要性を理解した。

より大きな観点からいえば、国民国家の形成過程と民俗学の成立やその目的によって、民俗学の意味やアカデミズムの布置は異なる。例えば、西ヨーロッパ諸国の対比軸として、民族の政治的統一という歴史的な流れに影響を受けながら成立したドイツやフィンランドの民俗学と、強力な中央集権国家への反動として成立したイギリスやフランスの民俗学がある [川田 1993: 20]。諸外国の民俗学の成立とその歴史が異なるように、民俗概念が射程する内容が日本の民俗学と同様の内容を示すとはいえない。一方で、他の学問領域が日本の民俗学と同様の方法論や理解に類似している場合も考えられる。

日本では民俗学とかつて民族学と呼ばれていた文化人類学が二つの「みんぞくがく」として自文化研究と異文化研究という対立軸で展開したのに対して、フランスでは民族誌学・民族学・文化人類学として、それぞれの学問体系が対象とする抽象度に応じて、研究方法とその対象が区分されている⁽¹²⁾。民族誌学は様々な文化的事象の記述を行う領域であるのに対して、民族学は記述された内容を分析し、解釈を提示する。民族学における分析では比較という視点は前面に現れていないが、文化人類学では比較に基づき、一般理論の構築を試みる。民族誌学・民族学・文化人類学の学問体系は相互に関連しながらも、各領域が独立して存在している [Geraud Leservoisier Pottier 2000: 14]。今日、民族学の研究領域にかつてフランスの民俗学が射程にしていた伝統的行事が扱われている。

フランスにおける民俗学研究は当初、1930年から1960年代に民間の伝承や芸術が中心となり、1980年代以降から文化遺産の領域がその対象となった⁽¹³⁾。フランスの民族学は同時に民俗学、異質な社会の研究の影響を受けている。

民俗学の系譜は、18世紀から19世紀に至るロマン主義やナショナリストの運動にさかのぼる。民俗学は習俗や宗教、信仰や俗信、及び儀礼や伝統、口頭伝承や村落の伝承および民衆の伝承という集会的関心の起源の発見のためのものであった。周知のように1800年から1820年代におけるグリム兄弟の有名な研究があげられる。W.S. トムズが民俗学の用語である民衆の知識をフォークロアという概念として提唱したのが1864年であった [ダンデス 1994: 37-41]。

フランスでは1804年以来、ケルト・アカデミーは前述のような状況に傾斜していった。また、19世紀から体系的で網羅的な民俗事象の収集が行われた。その特徴的なものが1904年に出版されたポール・セビオの『フランスの民俗』(Le Folklore de France)である。この著作には収集された15000以上の民俗事象が分類された。ヴァン・ジュネップが民衆の習俗をより科学的な研究として紹介している。ジュネップの方法は、民俗事象の収集ではなく、その習俗への一般理

論や説明を重視した点でフランスの民俗学に新たな展開を可能とさせた。また彼が1909年に初めて使用した通過儀礼の用語は人生儀礼における中心的な理論となった [Van Gennep 1909]。その当時、フランスの民族学は未開社会における人々を野蛮あるいは未開人として研究対象とした。ジュネップはマルセル・モースやデュルケムらの業績に対して、二次資料を扱った研究として批判する [キューズニエ セガレン 1991: 25]。このように当初、民俗学と民族学は明らかに異なる傾向を有していた。

ジュネップは、民衆を対象とした民俗学研究をその時期に再構成したが、ここで評価された民俗学的研究とはまさにその土地の習俗に対するまなざしであり、それがブルターニュ地方や典型的な地域文化の存在を裏付けることとなった。民俗学の再構成とともに、フランスの民族学に新たな展開が起こる。1960年代にかけて、フランスの民族学的研究はクロード・レヴィ＝ストロースにより設立された社会人類学研究室をも含み、フランス内部の研究を射程に入れた。この時期に雑誌『フランス民族学』(Ethnology Française)も発表される。ピエール・ブルデュエの社会学やエマニュエル・ル・ロワ・ラデュリの歴史学も同様にフランス内部の研究という動きに参加した。このようにして、フランスの民族学や文化人類学と他領域との対話は、フランスというフィールドを共有するという現実的な研究対象の確定によって、多くの議論が展開されたのである。その中でも都市はとりわけ熟慮すべき研究課題となった。都市は社会学から引き継ぐ対象であったが、社会学では1960年代から1970年代の都市化の動態の総体をとらえることができなかった。民族学的及び人類学的方法やパースペクティブは現代社会の私生活を理解するために、非常に有用とされた⁽¹⁴⁾。

このような展開を経て、民族学は民俗学が対象とした伝統や19世紀工業社会の現実を遺産という概念を用いて分析した。その一方で、民族学の主題として、フランス国内の文化における他者性に焦点があてられた。フランスの民族学では、理論的な現代化だけでなく、同様にかつて「異国なもの」を対象としたパースペクティブから新しい問題提起をしなければならないという意識が共有された。そして、新しい潮流の民族学の対象はすべての社会生活となったのである [Copans 1996: 95-103]。

以上、フランスの民族学の概略について述べた。フランスの民俗学と民族学が直面した限界性とは、現代社会の特質として語られるグローバルな社会とは異なる社会形態を対象としていた点であるといえよう。つまり、民俗学が対象とした地域的な特性を持つ農村や民族学が対象とした未開社会という土地に対するこだわりを捨て、そのどちらかに特化することなく、従来の学問の枠組みを応用し、調査対象を変化させた点で評価できるのではないだろうか。同時にフランスの民俗学や民族学がその調査対象を静的な理解ではなく、現代の私たちの社会を動的な事象として論じた点も挙げることができよう。このようなフランスの民族学における展開を、今後の日本の民俗学的研究の課題を考察するための1事例として取り上げた。

おわりに

以上、民俗学が他領域との差異化を図るために、その独自性について論じた。冒頭で課題とした現代社会に民俗学が介入するための学的枠組みをいかに構築していくかという問題に接近するために、伝承概念や民俗的研究の内省的検討、そしてフランスを事例として他国における民俗学

の展開を取り上げた。本稿では検討すべき点に十分に言及したとはいえませんが、論者がこれらを取り上げた背景には、国や地域、そして、文化的な差異を超えて、諸国の民俗学特有のまなざしを再評価するという試みがあった。このような観点から、民俗学的研究の課題をまとめると、以下の3点に集約できよう。

本稿が論じる民俗学の差異化は、これまで民俗学が論じてきた対象に様々な次元で私たちの生活に影響を与える変化の諸相を取り入れることであると強調したい。また、これまでである意味で制限されてきた研究対象を拡大すべきである。次に、グローバル化という私たちを取り巻く環境において、様々な背景を持つ人々を受け入れる土壌を学問の中に作り出すことである。そこに新たな民俗をめぐる概念が形成されていくのではないかと考える。現代民俗学という領域における結集と活動が、諸国の民俗学者が交流し、各々のアカデミックな問題を共有する場所としての役割を担うことを希望する。さらに、他領域から孤立していると表現されることが多い日本の民俗学が隣接学問や民間との対話をより活発にしていけるべきである。このような対話から個人々の研究に基づいた民俗学の限界性や可能性が共有されていくと考える。

註

- (1) 創設初期の民俗学では、周知のように伝承や常民概念など他の学問領域の中でも、民俗学としての差異を示しうる概念や重出立証法や周囲論のような研究方法の特徴があった。また、当時の民俗学の方向性に従い、民俗学的研究として伝統的社会であるムラを対象とし、その内部の習俗を体系的な実地調査に基づいて資料収集を行ってきた。しかし、1970年代から都市民俗学が提唱されたことに顕著のように、民俗学が時代的な変化とその問題を対象化できないという問題が指摘された。
- (2) 学問の独自性を方法論に求める見解は新谷尚紀や真野俊和が指摘しており、民俗学特有の方法論や理論化への検討は今後も重要な課題となってくるであろう。
- (3) 民俗学は文字資料を重点に置く歴史学に批判し、口頭伝承のような文字に残らなかった民衆の歴史を対象として創設期から展開した。いわゆる歴史学が文字資料のみに特化しないという近年の傾向に着目すれば、民俗学と歴史学の資料面での距離は接近してきたといえよう。
- (4) また、石田は当時の民俗研究が隣接学問から孤立している状況を指摘し、隣接学問との接点や相互理解の必要性を指摘する [石田 1955]。
- (5) 千葉は、文化人類学に対する柳田國男の意見を取り上げ、「広義の文化人類学の一部として民俗学を位置づけている」と解釈し、さらに「柳田自身はそれに対して史学の方には専ら知識の供給と共に、単なる史実を求めるよりも新しい文化を生む材料や原動力を含む風俗史の意義を重視する」としている。ここから、柳田國男が民俗学を史学の一部から文化人類学への方向転換とその経過を指摘している [千葉 1989]。
- (6) 真野は民俗学の対象を伝承文化とする見解を批判する。真野は民俗学が知識や技術のみを意味する伝承文化のみを対象とするだけでなく、それらを取り巻く生活における人々の判断や価値観の記述が課題であるとする [真野 2007b: 19]。
- (7) 平山は戦争や被爆体験における伝達継承の過程を伝承論で検討することについて言及している [平山 1992: 45]。ここでの焦点は非日常における伝承という点から論じられているが、記憶や感情の伝達を民俗学がいかに対象にするかという伝承論の課題として読み取ることができよう。
- (8) 古家は、沖縄県名護市辺野古で、シマから外へと伝承者が至る回路として婚姻・門中・移民・出

稼ぎを取り上げ、シマの人々の異文化体験を論じた〔古家 1997〕。また、篠原は、「生活の古典」や「地元に残った伝承型の話者」のみを扱う民俗学を批判し、沖縄県八重山郡竹富町の黒島や佐渡の民俗誌作成に関して、島から経済的条件によって移動する人々の考えを取り入れることで島の成立を理解するとしている〔網野・中村・福田・篠原・内山 1997: 113〕。「ムラ」とされる伝承母体に定住する人々ではなく、そこから移動する人々を含めることで、ある1つの民俗の文化体系を外部との関係で捉えることの必要性はこのように指摘された。

- (9) 河野真はドイツ民俗学が現代社会を対象とするようになった要因を2点挙げる。まず、1つめの要因は、ナチズムへ民俗学が加担したという事実への反省、及び1970年代前後における現代社会を射程にした方法論の展開という歴史的経緯である。次に、新聞や週刊誌を始めとした現代社会を反映する資料や、情報の収集と管理のための資料センターの整備にその要因があったとした〔河野 1994〕。
- (10) 論者は茨城県土浦市をフィールドに調査研究を継続中である。祭礼時における町内や町内会を単位とした人間関係や新住民と旧住民の交流に焦点を絞り、町内という民俗的区画の形成過程を参与観察での資料から論じた〔前川 2008b〕。郷友会で考察した移動者及び新住民だけではなく、町内という空間を切り取ることで、彼らを地域社会で受け入れる側となる旧住民側を対象としている。
- (11) 篠原徹編の『現代民俗学の地平1 越境』では、実際に国境を超える人々や境界を象徴する様々な区分を越えて移動する人々が描かれている。
- (12) 上記の類型は研究方法の段階的過程として民族学領域に広く浸透している。マルセル・マジェは民族誌学を人間集団における固有な文化という独自性を把握し、説明する学問とした。次に民族学は一つの研究領域に異なる専門分野を集合させた科学と定義した。最後に、文化人類学を社会的・文化的事象を関連づけ、一般的法則を引き出す科学としている〔キューズニエ セガレン 1991: 48〕。
- (13) フランス民俗学に関しては、その成立から現代の転換を論じた蔵持不三也の「民俗学の成立」を参照〔蔵持 1998〕。
- (14) 現代社会の私生活、及び都市に関する事例は、消滅へと至る旧市街地の人々の象徴的実践、都市空間の散歩の由来、職業的活動と居住計画との関係、不法労働者、労働組合の運動がある。また、フランスの民族学では、以前から事例としてあつかわれたジプシーの社会だけでなく、郊外の非行少年グループや都市の貧困層、及びアフリカ系移民のような民族文化を核にもつ新しい小集団を研究対象とした。

文献

- 網野善彦・中村 格・福田アジオ・篠原 徹・内山 節 1997『日本海と佐渡』高志書院
- Copans, Jean. 1996. *Introduction à l'ethnologie et à l'anthropologie*. Paris: NATHAN.
- Cuisenier, Jean. Segalen, Martine. 1986. *Ethnologie de la France* (Collection Que sais-je) . N2307. Paris: P.U.F.,
(J. キューズニエ, M. セガレン, 樋口 淳・野村訓子訳 1991『フランスの民族学』白水社)
- アラン・ダンデス他 1994『フォークロアの理論』法政大学出版局
- Dibie, Pascal. 1998. *La Passion du regard*. Paris : Editions Métailié.
- 福井憲彦 1986「歴史人類学をめぐる」『季刊 iichiko』1
- 福田アジオ 1982『日本村落の民俗的構造』弘文堂
- 福田アジオ・宮田 登 1984『日本民俗学概論』吉川弘文館

- 福田アジオ 1984『日本民俗学方法序説』弘文堂
- 古家信平 1997「民俗調査—伝承者と伝承母体の再検討—」福田アジオ・小松和彦編『講座日本の民俗学 1 民俗学の方法』雄山閣
- 古家信平 2001「異文化理解と民俗学」『日本民俗学』227
- Fournier, Laurent Sébastien. 2005. *La fête en héritage*. Aix-en-Provence: P.U.P.
- Geraud, Marie-Odile. Leservoisier, Olivier. Pottier, Richard. 2000. *Les notions clés de l'ethnologie*. Paris :Armand Colin.
- 平山和彦 1992『伝承と慣習の論理』吉川弘文館
- 石田英一郎 1955「日本民俗学の将来—とくに人類学との関係について—」『日本民俗学』24
- 岩本通弥 1980「現代民俗学への方法論的転換」千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂
- 岩本通弥 1998『『民俗』を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか—』『日本民俗学』215
- 岩竹美加子編訳 1996『民俗学の政治性—アメリカ民俗学 100 年目の省察から—』未来社
- Bonte-Izard. 1991. *Dictionnaire de l'ethnologie et de l'anthropologie*. Paris :P.U.F.
- 川田順造 1993「なぜわれわれは伝承を問題とするのか」『日本民俗学』193
- 河野 真 1994「現代民俗学への一視点—ドイツ語圏の民俗研究との比較において—」『比較民俗研究』10
- 蔵持不三也・飯島吉晴 1998「民俗学の成立」福田アジオ・小松和彦編『講座日本の民俗学 1 民俗学の方法』雄山閣
- 前川智子 2008a「郷友会における結集の民俗的仕掛け—神戸沖洲会における沖永良部島出身者の民俗芸能の実践を中心に—」『日本民俗学』255
- 前川智子 2008b「町内と祭礼—茨城県土浦旧市街地八坂祇園祭を中心に—」『史境』57
- 松本通晴・丸木恵祐 1994『都市移住の社会学』世界思想社
- 大間知篤三他編 1949『日本民俗学体系 1 民俗学の成立と展開』平凡社
- Poirier, Jean. 1969. *Histoire de l'Ethnologie (Collection Que sais-je)*. N1338. Paris: P.U.F. (ジャン・ポワリエ、古野清人訳 1970『民族学の歴史』白水社)
- 佐野賢治・谷口 貢・中込睦子・古家信平編 1996『現代民俗学入門』吉川弘文館
- 篠原 徹 1996「提言メモ／シンポジウム：転換期における人類科学」『民族学研究』60(4)
- 篠原 徹編 2003『現代民俗学の地平 1 越境』朝倉書店
- 真野俊和 2006a「人文学の基本システム—講義録「民俗学概説」(第 1 講)」『筑波大学地域研究』26
- 真野俊和 2006b「フィールドの発見—講義録「民俗学概説」(第 2 講)」『筑波大学地域研究』27
- 真野俊和 2007a「民俗学のデザイナー—講義録「民俗学概説」(第 3 講)」『歴史人類』35
- 真野俊和 2007b「ホモ・フォークロリカスのゆくえ—講義録「民俗学概説」(第 4 講)」『筑波大学地域研究』28
- 真野俊和 2008a「「定義する」ことは可能か—講義録「民俗学概説」(第 5 講)」『歴史人類』36
- 真野俊和 2008b「民俗誌叙述の方法—講義録「民俗学概説」(第 6 講)」『筑波大学地域研究』28
- 新谷尚紀 2005『柳田民俗学の継承と発展』吉川弘文館
- 新谷尚紀・関沢まゆみ 2008『ブルターニュのパルドン祭り—日本民俗学のフランス調査—』悠書館
- 菅 豊 2009「公共歴史学—日本史研究が進み行くひとつの方向(新年特集 日本史研究に望むこと)」『日本歴史』728
- 坪井洋文 1986a「故郷と都市民」『民俗再考』日本エディタースクール出版部
- 坪井洋文 1986b「故郷の精神誌」『日本民俗文化体系』12 小学館

千葉徳爾 1989 「『人の生きかた』について」『日本民俗学』177

Varagnac, André. Chollot-Varagnac, Marthe. 1969. *Les traditions populaires* (Collection Que sais-je). N1740.

Paris: P.U.F. (A. ヴアラニャック、M.C- ヴアラニャック、蔵持不三也訳 1980 『ヨーロッパの庶民生活と伝承』白水社)

Van Gennep, Arnold. 1909. *Les rites de passage*. Paris :Nourry.

渡辺欣雄 1990 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学』凱風社

柳田国男 1929 『都市と農村』朝日新聞社(『定本柳田国男集』16 筑摩書房、1962に再録)

柳田国男 1934 『民間伝承論』共立社(『定本柳田国男集』25 筑摩書房、1964に再録)

湯川洋司 1998 「伝承母体論とムラの現在」『日本民俗学』216